

京都少年鑑別所長 吉村 雅世氏 (高校31期)

- 1979年 立川高校卒業
- 1984年 お茶の水女子大学文教育学部教育学科卒業(教育心理学専攻)
卒業と同時に法務省入省(東京少年鑑別所に配属)
以後、現在まで全国各地の少年鑑別所で勤務
- 1992年 社会人向けの大学院である筑波大学大学院教育研究科カウンセリング
コースにおいて修士課程修了
- 2016年から現職(京都少年鑑別所長)



∞ はじめに ∞

皆さん、「少年鑑別所」を知っていますか? 「少年院」なら聞いたことがあるかもしれませんね。少年院は家庭裁判所の審判で少年院送致決定を受けた少年たちを収容して非行からの立ち直りのための教育を行っている法務省の施設ですが、少年鑑別所は、家庭裁判所で審判を受ける前の少年を収容して「鑑別」を行う施設です。「鑑別」とは、心理学・教育学・社会学・医学などの専門知識に基づいて、非行の背景にある問題を明らかにし、立ち直りのためにはどのような指導が必要かについての指針を示して、家庭裁判所の審判の資料とするものです。

∞ 進路選択 ∞

私は高校時代、進路についてとても悩みました。実は、立高時代は理系のクラスにいて、薬剤師を目指していた時期もありましたが、高校を卒業するころには、自分がどのような仕事に就きたいのか、道に迷ってしまったような状態でした。その後、何かしら人を援ける仕事がしたいと思い、大学では心理学を学びました。当時は、病院で勤務する心理職を目指していて、大学院に進学して臨床心理学に関する知識や技術を身につけるつもりでしたが、大学院受験までの勉強の節目として受けた国家公務員試験(心理区分)に合格したことから、大学院に進学せず法務省の心理技官として少年鑑別所での勤務をスタートしました。以後、転勤により、北は旭川から南は福岡までの全国各地の少年鑑別所で勤務しながら、数多くの非行少年たちと出会ってきました。この仕事に就いて早いもので30年余りになりますが、飽きたことも辞めたいと思ったことも一度もありません。高校時代には想像もつかなかった進路ですが、「天職」だったのかもしれないと思います。

∞ 少年鑑別所で働いて思うこと ∞

皆さんがニュースで知るような非行を犯した少年は、必ず少年鑑別所に入所します。こんな凶悪な事件を起こした少年は厳罰に処すべきと感じる方も多いでしょう。被害に遭われた方々のことを思えば当然の反応です。けれども、罰だけが非行を抑止できる手段ではないことも、この仕事を始めてすぐに理解しました。非行は社会を映す鏡です。貧困や虐待、家庭の養育機能の低下、少年本人の能力面や資質面でのハンディキャップなど、非行には一筋縄ではいかない問題が複雑に絡み合っています。その中から比較的取り組みやすい糸口を見つけ出し、少年本人の成長・発達を促しながら、再非行を防止していくにはどうすればいいか、犯罪心理学などの知見と、これまで多くの少年たちに接する中で蓄積してきた経験知を総動員しながら、少年鑑別所は施設全体で鑑別に取り組みます。

けれども、決して暗い仕事ではありません。少年たちは日々成長し、変化していく可塑性に富んだ存在です。彼らには未来があるのです。彼らが下を向いて非行や犯罪を繰り返すばかりの人生を送るのか、社会の一員として適応し、より良い人生を送りながら非行とは無縁な生活を送るのか、少年鑑別所への入所はその分岐点です。彼らには何が必要であり、大人や社会は何をすべきか、そして彼ら自身もどちらの方向に向かって努力していくべきなのかを明らかにし、より良い方向への歩みを後押しする仕事は、未来志向の、希望のある仕事です。人はなぜ非行をするのか、そのこと自体も簡単には答えが出ない永遠の問いですが、それだけに、非行をしない人生を少年たちと共に考えていくことは、やりがいのある、奥の深い仕事です。



野球部OBが出場したマスターズ甲子園の応援に
監督は同級生の林茂智氏

∞ 終わりに ∞

高校・大学時代は、進路について迷うことが多いと思います。私自身も、どの仕事か自分に向いているのかわからず、途方に暮れてしまった時期がありました。けれども、仕事との出会いは人との出会いと似ていて、世の中には未知の仕事がたくさんあり、その中からたまたま出会った仕事と付き合っているうちに、その仕事の良さも味わいもわかってきて、気がつけば、その仕事と過ごした時間が人生の大半を占めていたということも、珍しくないと思います。

あまり難しく考えずに、自分に期待して受け入れてくれた職場で全力投球してみるのがいいのではないのでしょうか。「自分に合う仕事」は探すものではなく、仕事との良い関係を作っていく努力の中で、結果として得られるもののように思います。